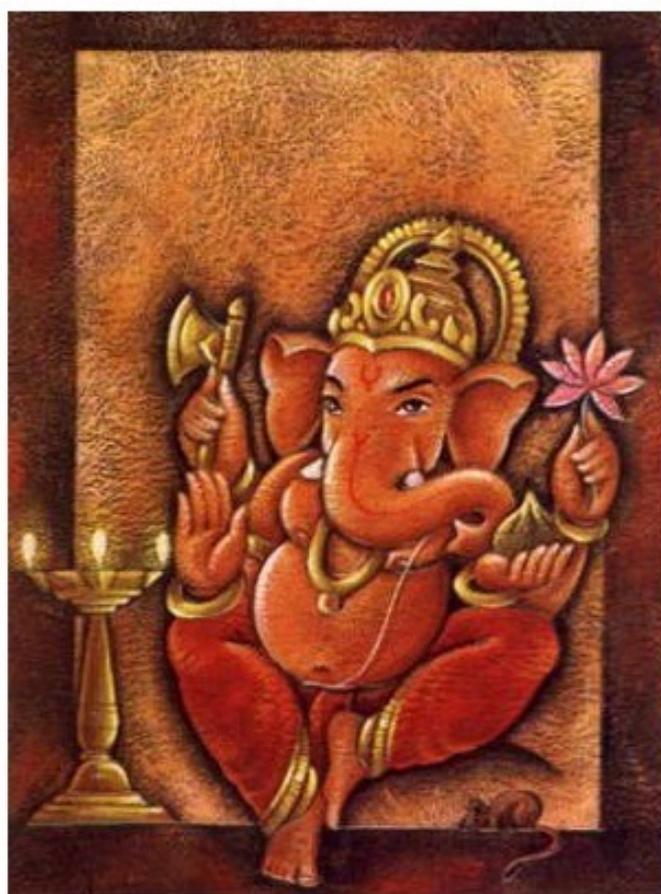


ガネーシャの恋



Tack

インドにおけるヒンドゥー教の神々の中でもっともインドの人々に愛着を持たれている神、それがガネーシャである。

ガネーシャ、それはゾウの顔を持った神で、インドの街角いたるところで見ることができる。

「ガネーシャの恋」

T a c k

子供のころに誰しもが持っていた純粋な気持ちは、大人になっても皆、持ち続けている。

三つの願い

次郎の小学校では、毎年桜の花が咲くこの時期になると一年生と二年生の低学年の児童は、遠足を兼ねた写生大会を次郎の住んでいる市のとなりの市にある青空動物園で行っていた。

この動物園は、桜の名所としても有名であった。

今年二年生の鈴木次郎は、去年の一年生の初めての遠足でこの動物園のゾウに会って以来、このゾウが大好きになり今年のこの遠足を楽しみにしていた。

「それでは、みなさん午後三時にまたここに集合して下さい」

と次郎のクラスの担任の先生が言うか言わないかのうちにクラス全員がクモの子を散らすかのようにそれぞれの仲間と走り去って行った。

一人残された次郎は、この動物園の一番外れにあるゾウがいる場所に向かって歩いていた。

途中、ライオンやサル山のまわりには、多くのクラスメートが陣取りそれぞれ絵を描いたり、お菓子を食べながらおしゃべりを楽しんでいた。

そして、その前を通り過ぎる次郎には、誰も気がつかないのであった。

次郎は、左手にお母さんが作ってくれたランチの入ったカバン、右手にはスケッチブックを持って歩いていた。

桜並木を五分ほど歩くとようやくゾウの大きな体が見えてきた。

次郎は、去年と同じようにゾウから一番近い大きな桜の木の下にあるベンチに座り絵を描くを準備を始めた。

ゾウのまわりには誰もいなかった。

それは、去年も同じで次郎は気にも留めなかった。

桜の花がやわらかな春の風でゆれていた。

絵を描く準備を始めた次郎がゾウを見ながら。

「君っていつ見てもものんびりしていていいよね」

と言った。

するとゾウが、

「ボク、もうすぐ病気で死ぬんだ」

と次郎には聞こえた。

「えっ、今何か言った？言うわけないよね」

あいかわらず心地よい風がふいていたが、心なしかゾウが悲しい目をしているように次郎には思えた。

あたりが急に騒がしくなった。

めずらしく次郎のクラスメートの男の子たちがやってきた。

「次郎、こんなところで何やってんだよ」

クラスの男の子の一人が言った。

「ゾウを見てるんだよ」

次郎はニコニコしながらこたえた。

別の男の子が、

「変なやつだな、ほかにもいっぱい動物がいるじゃないか」

クラスメート男の子たちは、笑いながら、

「こんなやつ、ほっといてほかの動物見に行こうぜ」

と走り去って行った。

次郎は何事もなかったかのようにふたたびゾウの絵を描き始めた。

しばらくすると、今度はかわってクラスメートの女の子とマドカがやってきた。

マドカは、クラスの人気者で男の子たちのあこがれの存在だった。

しかし、次郎にとってはマドカはあこがれという存在ではなかった。

それは、マドカと話すチャンスはほとんどなく遠い存在だったからであった。

二人は、桜を見ながらこちらに近づいてきた。

クラスメートの女の子がゾウを見ている次郎に気がつき、

「きもっ、マドカ、あの子ずっとゾウを見てる」

「次郎君、ゾウが好きなの」

とマドカが次郎に近づいてきてやさしく聞いた。

「ほら、やさしい目をしているだろ」

次郎は、うれしくなってこたえた。

クラスの女の子が次郎とマドカの間に割り込んできた。

「やっぱりきもっ、マドカあっちに行こう」

マドカは、クラスメートに手を引っ張られ去っていった。

次郎は、去っていくマドカの後姿を見ていた。

「君は、ゾウが好きなのかい」

いつのまにか、次郎のそばに、飼育員が立っていた。

「うん、大好きだよ。でもおじさん、ゾウさんもうすぐ病気で死んじゃうの」

飼育員は、困った顔をして、

「そうだよ、人間も動物もいつか必ず死ぬんだよ」

と答えた。

「そんなのウソだよ、ゾウさんは死なないよね」

次郎は、少し涙声で飼育員にうったえた。

「君は、こころのやさしいいい子だね」

「そうだ、君にいいものをあげよう」

飼育員は、近くにあるジュースの自動販売機の横にある空き缶入れをあさり始め、その中からジュースの空き缶3つを取り出し、それぞれの空き缶のプルタブを取り外した。

飼育員はそれを次郎に渡しながらか、

「これは、願い事が何でもかなう不思議なリングだよ」

次郎は、それを不思議そうに受け取りながら、

「リング？これ空き缶のフタでしょ」

と飼育員に言った。

飼育員は一瞬よろけたが、気を取り直し真面目な顔をして、

「このリングを指にはめ、願い事といっしょにある呪文を言うのだよ」

「呪文？」

「そうだよ、呪文だよ、こう言うのだよ。」

飼育員は、大きく一息吸って、

「ガネーシャ！」

「ガネーシャって何？」

次郎は飼育員にたずねた。

「ゾウの顔を持った神様だよ」

飼育員は、三つのプルタブを渡しながら、

「願い事は三回、大切に使うんだよ」

「うん、わかった」

次郎はもらったうちの一つを指にはめながらゾウに近づいていった。

そしてゾウの正面で、

「ゾウさんの病気が治り長生きしますように、えっと、ガネーシャ！」

と言った。

飼育員はあわてて次郎に近づいてきた。

「もう使っちゃったの」

次郎は、ニコニコしながら、

「うん、だってゾウさん死んじゃったらかわいそうだもん」

飼育員は、苦笑いをして、

「残り二つは、大切に使うんだよ」

くったくのない次郎はゾウに向かって、

「ゾウさん、長生きしてね」

と話しかけた。

そして、振り返るともうそこには飼育員の姿はなかった。

次郎はその後、何事もなかったように大きな桜の木の下でここちよい風にふかれながら大好きなゾウの絵を描き、お母さんの作ってくれたランチを食べ午後三時前には集合場所に向かうため、ゾウの前から去っていった。

「次郎君ありがとう」

とゾウが言ったが次郎にはそれが風の音にしか聞こえなかった。

その日の深夜、誰もいなくなった動物園に三つの影があった。

一つは、飼育員、あとの二つは飼育員の前に膝まづいていた。

「お前たちは、次郎君の願いを最後まで見届けるのだぞ」

と飼育員が二つの影向かってに言った。

「はい、ガネーシャ様」

二つの影は深く礼をしたのであった。

約束

遠足から二週間経ったある日、
「みなさん、この前行った青空動物園の絵を発表してもらいます」
次郎のクラスの担任の先生がみんなに言った。
「ハイ」
「ボクは、百獣の王ライオンを描きました」「私は、首の長いキリンを描きました」
「ボクは、サル山のサルを描きました」
クラスみんなはそれぞれ自分の絵を自慢していた。
「次郎君は、何を描いたのかな」
担任の先生が聞いた。次郎は、恥ずかしそうに自分の絵をみんなに見せた。
するとクラスの女子が、
「きもっ、絵がリアルすぎない」
次郎の絵には、ゾウと飼育員が描かれていた。
「飼育員のおじさんまで描いてある」
その時、授業終了のチャイムが鳴った。
「それでは、放課後みんなで後ろの掲示板に、絵を貼っておいて下さい」
と言って担任の先生は教室を出て行った。
クラスみんなはそれぞれ自分の絵を好きな場所に貼り始めた。
次郎も自分の絵を貼ろうとしたが、クラスの男の子たちが邪魔をしてきた。
「やめてくれよ」
「こんな変な絵貼れないよ」
次郎が貼ろうとしていた絵をクラスメートの男の子がじゃまをしたため破ってしまった。
クラスメートの男の子たちは、ことの重大さに気がつき逃げるようにその場を去って行った。
一人次郎は破れた絵の切れ端を持って立っていた。少し泣いていた。
そこに、クラスメートの女の子とマドカがやってきた。
「きもっ、次郎君泣いてる」
「どうしたの次郎君」
マドカがやさしく聞いた。
「何でもないよ」
「みんなにいじめられたのね」
マドカは、破れた次郎の絵を拾い始めた。
「何やってんのマドカ、先に行くわよ」
「先に行ってて」
女の子は、マドカを残し去って行った。
「ボクは、ゾウが好きだけなんだ、それなのに、それなのに、、、」
マドカは、次郎が持っていたゾウの絵の切れ端と拾い集めた絵をつなぎ合わせて掲示板に貼り始

めた。 「みんな次郎君のやさしさがわからないのよ、きっと」

「そうだ、あれを使おう」

「あれって？」マドカが次郎に聞いた。

「動物園でおじさんにもらった、どんな願い事でもかなう不思議なリングだよ」

次郎は急に思い出したのであった。ポケットの中には、あの飼育員にもらった不思議なリング（とはいっても普通のプルタブ）が二つ入っていた。

それを出しながら、

「あと二つあるから一つはポケットにしまって、もう一つを指にはめて、え〜と、みんなからいじめられないように、ガネーシャ！」

そこに、クラスの子たちが戻ってきた。

「まだ貼ってあるぞ」

そして男の子たちは、マドカが張り合わせた次郎の絵を剥がそうとした。

「やめなさいよ、次郎君は何も悪いことはしていないじゃないの」

マドカは少し怒ったように男の子たちに言った。

「お〜こわっ、みんな帰ろうぜ」

男の子たちは、逃げるようにその場を立ち去って行った。

「ぜんぜん願い事なんか、きかないや、おじさんの言ったことはウソなんだ」

と言って次郎はポケット中の残りの一つのリング（プルタブ）をその場に投げつけて走り去って行った。

一人残されたマドカはそのリングを拾いそっとポケットにしまい込んだのであった。

翌朝、次郎のクラスがざわついていた。次郎の絵を破った男の子が、
「あれっ、おかしいな次郎の絵は破ったはずなのに」
クラスメートの女の子も、
「きもっ、何で元どおりになってるの」
そこに見かけない男の子と女の子がクラスに入ってきた。
そして見かけない女の子の方が、
「気持ち悪いのは、あなたの顔じゃない」
クラスメート女の子は、びっくりして自分の顔を押しえた。
クラスメートの別の男の子が、次郎の絵をはがそうとした。
すると今度は見かけない男の子の方が、クラスメートの男の子の手を押しえながら、
「やめなよ、人がせっかく描いた絵においたをするんじゃないよ」
と遠山の金さん風に言った。
クラスメートの女の子が言った。
「あなたたち誰なの」
そこへ、担任の先生が入ってきた。
「みなさん席について下さい、転校生を紹介します。金守（きんまもる）君と石屋カオリさん
です」
二人は、クラスみんなにおじぎをした。
クラスメートたちがざわついていた。
「金守君は、宮島マドカさんのとなり、石屋カオリさんは、鈴木次郎君のとなりに座って下さい
」
と担任の先生が言った。

その後、いつのまにかいじめがなくなったことは、次郎はもちろんクラスの誰も気がつかないのであった。

さて、この二人の転校生こそが、動物園の二つの影、飼育員（ガネーシャ）の使いなのであった。

二人の使いの苗字、金（ガネ）と、石屋（イシャ）、二人合わせて「ガネーシャ」

別れ

夏休みも近づいてきたある日、クラスの担任の先生が、みんなに言った。

「みなさんにお知らせがあります。今度、宮島マドカさんが、うちの都合で転校することになりました」

クラスがざわついた。

マドカは、クラスの人気者で女の子の中には泣き出す子もいた。

「明日、みなさんでマドカさんのお別れ会を行います。何か思い出になるものをみなさん一つ持って来て下さい」

と担任の先生が言った。

次郎は突然のことでよくわからなかったが、ただ明るくてやさしいマドカがいなくなることだけは理解できた。

次郎はなぜだか急に寂しい気持ちになっていた。

その日の深夜、小学校の校庭の片隅に例の三つの影があった。

「ガネーシャ様、願い事がかなうリングを持ったマドカさんが次郎君から離れていってしまいます」

と、金守が報告した。

あいかわらず飼育員の姿をしたガネーシャがゆっくりとした口調で言った。

「それも運命、お前たちは、次郎君のそばでその日が来るまで次郎君を守るのだぞ」

「いったいつまで待てばいいのでしょうか、ガネーシャ様」

と、石屋カオリがたずねた。

「それはわからん、人の運命は誰も決めることができない、まして自分で決めることもできないのだよ」

そして、二人の使いは声を合わせて言った。

「はい、かしこまりました。その日が来るまで待ちます。ガネーシャ様」

二つの影が深く礼をし、顔を上げた時には、そこには飼育員の姿はもうなかった。

そして次の日のマドカのお別れ会は、クラスで盛大に行われた。

しかし、そこには次郎の姿はなかった。

昨日の晩からめずらしく熱が出て学校を休んだのであった。

マドカは、次郎が投げ捨てたリングを今日、次郎に渡そうと持って来ているのであった。

マドカは、次郎が欠席しているとわかり少しがっかりした、それがマドカにはリングを渡せず残念なのか、次郎に会えなくて残念なのかマドカにはよくわからなかった。

そのお別れ会の片隅に、金守と石屋カオリがいた。

「せっかく最後に会うチャンスだったのに熱で休むだなんてこれからの運命が心配になるな」と守がつぶやいた。

翌日、次郎は学校に来たが、もちろんマドカはいなかった。

次郎はこころにぽっかりと穴があいたような感じになっていた。

そしてそれが初恋だとわかるのは次郎が大きくなってからであった。

次郎の家の部屋の壁には次郎が描いた動物園のゾウと並んでいるマドカの絵が貼られていた。

この絵は、マドカにプレゼントするはずの絵だった。

その絵の中のマドカは、やさしく笑っていた。

すれ違い

数年後、六年生になった次郎たちの卒業式が近くなったある日、クラスの女の子たちが何やら話していた。

「二年の時転校した宮島マドカちゃん覚えてる」

「うん、覚えてるかわいくて人気者だったよね」

「そのマドカちゃんが親戚の結婚式で来週もどってくるんだって、うちのお母さんが言ってた」

「ねえ、みんなで会いに行かない」

と女の子が言うと、近くで聞いていたクラスの男の子たちもマドカちゃんに会いたいと言ってクラスのほとんどの子たちが会いに行くことになった。

しかし、その時、クラスにたまたまいないのは次郎だけであった。

次の週、小学校の近くの公園でマドカを中心にクラスのほとんどの子たちが集まっていた。

「みんな元気だった」

とマドカが言うと、

「マドカ、きれいになったね」

と女の子が言った。

男の子たちもマドカがきれいになっているので、意識して何も言うことができなかった。

そして全員を見渡してマドカが言った。

「あれ、次郎君は？」

「次郎、あいつはいないよ、今日マドカちゃんと会うのも知らないんじゃないかな」

男の子は、マドカが突然次郎の話をするので、少し不思議に思ったが、みんなと一緒にまた別の話題にもどっていった。

マドカは、あの時次郎が投げ捨てたリングをずっと大事に持っていたのであった。

それを次郎に返そうと持って来ていた。

その次郎が来ないとわかったマドカは、リングをバッグの奥にそっとしまい込んだ。

マドカは、あの時以来、ずっとリングを大切に持っていた。

そして、リングを見ると次郎を思い出していた。

その日、深夜の公園に三つの影があった。

「ガネーシャ様、本当に二人は再会できるのでしょうか」

使いの一人、金守が聞いた。

石屋カオリも、

「次郎君は本当にタイミングが悪すぎます」

あいかわらず飼育員の姿をしたガネーシャは、

「まあ、いつかきっと会える、その時まで待て」

と言うだけであった。

金魚と桜

新学期になり、次郎は中学二年生になっていた。

次郎はクラスでも大人しい目立たない生徒であった。

勉強も特にできるわけでもなく、スポーツもあまり得意ではなかった。

クラスではいじめの対象にもならず空気のような存在であった。

(もちろん次郎が小学二年のときにガネーシャにお願いした二つ目の願いが効いていることは次郎も誰も知らないのであった)

次郎は小学校の時、大好きで得意だった絵もあまり描かなくなっていたが、ただ一枚青空動物園のゾウとマドカの絵だけはずっと次郎の部屋に貼ってあった。

特に理由はないのだがなぜか、はがす気になれなかった。

次郎はクラブ活動も生物部というあまり活動が盛んではないクラブに所属し、放課後はまっすぐ家に帰っていた。

そんな次郎の唯一の趣味は中学に入ってから飼い始めた金魚であった。

60センチのガラスの水槽にらんちゅう、オランダ獅子頭を数匹飼っていた。

次郎は優雅に泳ぐ金魚を見るのが大好きだった。

休みの日は朝から晩まで一日中水槽をながめていてもあきることはなかった。

そして一ヶ月に一度、となり町にある観賞魚専門店に行くのが楽しい行事の一つであった。

ある日曜日、次郎はいつものようにとなり町に向かうため駅に向かって歩いていた。

そんな次郎をコーヒーショップから見ている二人がいた。

そう、ガネーシャの使い金守と石屋カオリであった。

「ずっと次郎君を見ているとリングを持っているマドカさんに会う機会なんて絶対ないと思えてくるわ」

とカオリが言った。

「そうでもないかもよ、いよいよ会うチャンスが来たかもよ」

と守がウインドウ越しに外を指差した。

「えっ、どういうこと？」

とカオリが言いながら外を見ると駅前一枚のポスターを見ている次郎の姿があった。

[世界の淡水魚展]

とそのポスターには書かれてあった。

「淡水魚がどうかしたの？」

「場所を見ろよ」

と守が言った。

そこには[青空動物園]と書かれてあった。

青空動物園といえば次郎とマドカとの思い出の場所、そして今は、あの時と同じ桜の季節であった。

「桜！」

とカオリが小さく叫んだ。

最近、カオリはマドカを見守っている機会が多かった。

マドカは中学に入り写真部に所属していた。

その写真部の今月の課題が「桜」だった。

「でも、マドカさん青空動物園まで来るかしら？」

とカオリが言った。

「それがうまいことに来週日曜日こっちの親戚の家に遊びに来ることになってるんだよ」

「あなた運命を作ったの？」

「作っていないよ偶然だよ」

と守が言った。

「でも同じ日に青空動物園に行くかしら」

「それはわからない、でも世界の淡水魚展は来週の日曜日までだから次郎君が行く可能性は高いよ」

「そうね」

と二人はウインドウ越しに駅の雑踏に飲み込まれていく次郎を見送った。

次の日曜日、青空動物園の入り口で石屋カオリが金守を待っていた。

守があわててカオリのところに走ってきた。

まるでそれはデートの待ち合わせに遅れたかのようであった。

「マドカさんは？」

「マドカさんはやっぱりカメラを持ってここへ来たわ。今、中で撮影中よ。ところで次郎君は？」

「それが、、、」

「どうしたの？」

「予定ではここに来ることになっていたんだが、今朝、朝いつもの観賞魚屋から電話があって今日金魚の間屋に行くから一緒に行かないか、と誘われてそっちに行ってしまったんだよ」

すまなさそうに守が言った。

「え〜っ」とカオリはおどろいて叫んだ。

ガネーシャの使いの二人が見つめる先には、桜の写真を熱心に撮っているマドカがいた。

マドカは、桜を見ながらあの日の遠足のことを思い出していた。

そして、マドカのバッグの中には、次郎との思い出のリングがあった。

避暑地

八月、次郎もマドカも高校生初めての夏休みを迎えていた。
あいかわらず、二人が出会う機会はまったくないのであった。
さて、おしゃれなシティーホテルのプールサイドでトロピカルドリンクを飲みながら語りあっている二人がいた。

そう、ガネーシャの使い、金守と石屋カオリであった。
二人は他人が見ると普通の恋人どうしのように見えた。

「本当にいつになったら会えるのかしら？」

とカオリつぶやくように言った。

「最近のマドカさんは何をやってるの？」

と守が聞いた。

最近、守が次郎、カオリがマドカを見守っていた。

「マドカさんはテニス部に入って高校生活をエンジョイしているわよ、、、ところで次郎君は？」

とカオリが守にたずねた。

「それがクラブにも入らず、あいかわらずの魚好きで、最近は釣りを始めたんだよ」

「釣りって何を釣るの？」

とカオリが聞いた。

「それがブラックバスという沼や湖に生息する外来種で今ブームらしいよ」

「ふうん、ブラックバスね、、、えっ、今何て言った？」

「ブラックバス」

守が不思議そうに答えた。

「そうじゃなくて、どこにいるって？」

「沼や湖」

「それ、湖！もしかしたら、避暑地で有名な川神湖にもいる？」

「いるらしいよ、今度次郎君が友達と行くって言ってたから」

「えっ、行くっていつ？」

「来週だったかな、でもどうして？」

「やった～。マドカさんも来週、川神湖に行くのよテニス部の合宿で。いよいよ会えるときがきたようね」

カオリはうれしそうに守に言った。

一週間後、避暑地の湖畔に立つ金守と石屋カオリがいた。

「あそこがブラックバスの釣りのポイント」

と守が湖の一角を指差した。

「そしてそこがテニス部の朝のランニングコース」

とカオリがこたえた。

「明日朝、次郎君がここで釣りをするのはほぼ決まっているから会う確立は高いぞ」
守はうれしそうに言った。

翌朝は、あいにくの雨であった。

次郎は友人と二人で予定どおりの場所で合羽を着て釣りを始めた。

後はマドカたちがランニングでここを通過するだけであった。

しかし、マドカたちは来なかった。

雨でランニングは中止、急遽室内練習場でストレッチに変更になったのであった。

「本当についていないね」

カオリが残念そうに言った。

「天気も変えてはダメだからね」

と守もがっかりして言った。

その雨も午後にはあがり、避暑地の湖には美しい山並みが映し出されていた。

作られた運命

次郎は高校三年生になっていた。

高校最後の夏休み、次郎は運送会社の配送センターでお中元の仕分けのアルバイトをしていた。

深夜、配送センターの屋上に二つの影があった。

そのうちの一つガネーシャの使い、金守が言った。

「久しぶりに次郎君とマドカさんが会うチャンスが来たぞ」

「どうして？」

と石屋カオリが聞いた。

「マドカさんが、駅前の予備校の夏期講習に来るんだよ」

「それと次郎君がどう関係あるの」

と不思議そうにカオリがたずねた。

「この配送センターは、その予備校のとなりのデパートのお中元を扱っているだろ、何とか次郎君にデパートに行かせるのさ」

「でも勝手に運命を変えるのはガネーシャ様に禁止されているはずよ」

「わかっているさ、でもこのチャンスを逃すとまた次のチャンスがいつ来るかわからないじゃないか」

金守と石屋カオリの二人の使いも、もう十年近く次郎とマドカを見守ってきており、だんだんと次郎とマドカが本当に会えるのか、不安になってきているのであった。

ある日、配送センターの主任に次郎は呼び出された。

伝票を駅前のデパートに届けてほしいということだった。

次郎は、快く返事をして配送センター近くのバス停からバスに乗って駅前のデパートに向かうのであった。

ここまでは、二人の使いの計画どおりであった。

何も知らない次郎は、バスの窓から見える海を見ていた。

次郎の配送センターは、港の近くにあり町から少し離れていた。

四十分ほどバスに揺られ終点の駅に着いた次郎は、駅前にあるデパートに向かって歩いた。

夏の暑い日ざしがコンクリートに吸収され、足元からも熱気があふれていた。

デパートの屋上から二人の使いがじっと次郎を見ていた。

もうすぐ運命の再会であった。

さて、反対側からやはり、白いTシャツにジーンズの短パンをはいたマドカがこちらに向かって歩いていた。

「もうすぐ会えるぞ」

守がつぶやいた。

あと五十メートル、あと二十メートル、あと五メートル、

「なに！」

二人が叫んだ。

次郎に一人のおじいさんが道をたずねたのであった。

次郎は、ていねいにそのおじいさんに道を教え始めた。

その横を、マドカが足早に通り過ぎて行った。

次郎は、おじいさんに、道を教えるとふたたびデパートに向かって歩き始めた。

おじいさんは、次郎の後姿にていねいにおじぎをした。

そしてゆっくりと空を見上げた。

道行く人々はおじいさんが空を見ているように見えているのだが、実はデパートの屋上の二人を見ているのであった。

そして守とカオリは声をそろえて叫んだ。

「ガネーシャ様！」

その日の深夜、誰もいないデパートの屋上で、二人の使いは、あいかわらず飼育員姿のガネーシャに怒られていた。

「あれほど、運命を作ってはいけな

いと言ったはずだぞ」

と強い口調でガネーシャが言うと、

「申し訳ございません」

二人はガネーシャの前にひざまづき頭を下げた。

「二人がいつ会えるかわからないので、つい運命を作ってしまった」

と守が苦しい言い訳をした。

「二人は今、会う運命ではないのだよ」

ガネーシャは、二人の使いを諭すように今度はやさしく言った。

「心配しなくても二人はいつか必ず会う運命なのだよ、それまでは大変だろうが頑張っ

て二人を見守るのだぞ」

「はい、ガネーシャ様」

二人の使いは再び深く頭を下げた。

声だけの再会

次郎もマドカも大学二年生になっていた。

次郎はあいかわらず配送センターでのアルバイトにあけくれる毎日であった。

そんなある日、配送センターの主任が、

「鈴木君、明日物流センターの方に応援に行ってくれないか」

と言ってきた。

次郎がアルバイトをしている運送会社は一般の貨物を扱う配送センターの他に、日用雑貨専用の大きな物流センターを持っていた。

「はい、わかりました」

と次郎はこたえた。

次郎はこれまでも何回か物流センターの方に応援に行ったことがあった。

応援当日の朝、物流センターがある町に向かう電車で次郎は乗っていた。

早朝であるため乗客はまばらであった。そのまばらな次郎の車両の隣の車両の乗客の中に見覚えのある二人がいた。

そう、ガネーシャの使い、金守と石屋カオリであった。

次郎がいつも働いている配送センターは海沿いにあったが、物流センターは郊外の山沿いにあり、次郎の住んでいる町から電車で三十分ほどの場所にあった。

次郎は人影のまばらな車内で空いている座席にも座らず一人ドアのそばに立って窓から外をながめていた。

「もしかすると、もしかするかも」

とカオリが守に言った。

「どういうこと」

守が訪ねた。

「マドカさんが今どこでアルバイトしているか知ってるわよね」

「知ってるよ、駅前のドラッグストアだろ、たしか今度新装オープンするはずだよ」

「そう、その新装オープンの特売で物流センターからの出荷が増えるから次郎君は今日応援で呼ばれたのよ」

「でもそれがどうして」

と守は不思議そうにカオリに訪ねた。

「もしかすると配送ドライバーの助手として次郎君はそのドラッグストアに行く可能性があるのよ」

「おいおい、運命を作るなど、ガネーシャ様に言われたのを忘れたわけじゃないよな」

「わかっているわよ、だからもしかすると、と言っているじゃない」

二人は隣の車両から次郎を見つめた。もうすぐ物流センターのある駅であった。

「おはようございます、配送センターから応援に来ました鈴木です」

次郎はいつものとおり顔見知りの責任者の人に挨拶した。

「お～っ、待ってたよ鈴木君、今日は配送車に乗って駅前のドラッグストアの特売品の荷卸しの手伝いをしてくれるかな」

「はい、わかりました」

以前にも配送車に乗ったことがあるので次郎は快く返事をした。

物流センターの裏手にある山の中でガネーシャの使いの守とカオリはあまりにもあっけない展開に驚いていた。

「こんなことってあるのかしら、もしかしたら今日二人は会

えるかも」

とカオリはうれしそうに言った。

「でも、今日マドカさんがドラッグストアにいるとは限らないじゃないか」

と守がカオリにたずねた。

「それが、今日は新装開店だからアルバイトは全員出勤ということになっているのよ」

「それは、もしかするともしかするかも」

守はうれしくなっていた。

今回は、運命を作ったわけでもなくここまでトントン拍子にきているので守もカオリも驚くばかりであった。

「行ってきます」

次郎は、配送車に乗って物流センターを後にした。

「私たちも先回りしてドラッグストアに行きましょう」

カオリがうれしそうに言った。

次郎の乗った配送車は高速道路を使い一路市内へ向かっていた。

次郎は助手席から高速道路沿いの新緑の木々を見ていた。

「鈴木君、受付をしてくるから君はここで待ってて」

と配送車のドライバーが次郎に言った。

ドラッグストアは開店準備のため納入のトラックが溢れかえっていた。

ドライバーは荷卸の順番を確認するため受付に行ったのであった。

「ついてるぞ、すぐ降ろせるらしい」

とドライバーが受付から帰ってきて次郎に言った。

ドラッグストアの向かいの道路から守とカオリが心配そうに次郎を見ていた。

「マドカさんは店内にいるの？」

守が心配そうにカオリに聞いた。

「ちゃんと来てるわよ、シャンプーのコーナーで商品の陳列をしているわ」

「おいおい本当なのかい、次郎君のトラックは確か特売のシャンプーを積んでいたよね」

守はあまりの偶然に驚いていた。

「鈴木君、私が検品をするから君は検品の終わったものを店内に搬入してくれないか」

「はい、わかりました」

次郎はドライバーの指示のとおり検品の終わったものから店内に運び始めた。

まず、紙おむつの大きなダンボール箱をいくつか台車に載せ運び始めた。

何回か店内とトラックを往復していると、ドライバーが次郎に言った。

「紙おむつは私が残りをやるから鈴木君はここにあるシャンプーを店内に運んでくれないか」
次郎はドライバーの指示通りにシャンプーの入ったダンボールケースを台車に載せ始めた。

「えっ、シャンプー！」

店の前の反対側の道路で守はびっくりして叫んだ。

「大きな声を出さないでよ、びっくりするじゃない、ちょうどマドカさんはシャンプーの陳列棚で在庫チェックをやっているから次郎君に必ず会えるわ」

カオリが冷静に言った。

守とカオリは二人の出会いを見届けるために道路を渡りドラックストアの正面に立ち中を見渡した。
店内には、シャンプーの在庫を一生懸命数えているマドカ、そして商品搬入口からシャンプーを載せた台車を押してマドカに近づいてくる来る次郎。

「いよいよだね」

と守。

「いよいよだわ」

とカオリ。

二人はじっと店内の二人の距離がだんだんと縮まっていくのを息を殺して見ていた。

シャンプーの陳列棚まで来た次郎がシャンプーの入ったダンボールケースを台車から降ろし始めた。

そのシャンプーの陳列棚の反対側で在庫のチェックをしていたマドカは、荷卸しを始めた誰かに気がつき、

「ご苦労様です」

と陳列棚を回って反対側でマドカに背を向けて荷卸しをしている次郎に声をかけた。

声をかけたマドカはまた陳列棚の反対側に戻り、商品のチェックを始めた。

一方、シャンプーの荷卸しの終わった次郎は、反対側にいるマドカに向かって、

「シャンプー、ここに置いておきます」

と言って空の台車を押して商品搬入口の方へ戻って行った。

「こんなことってありなの？」

一部始終を見ていたカオリがため息をつきながら言った。

「もう少しだったのになぜなんだろう」

今度こそはと思っていた守はすれ違いの多い次郎とマドカにがっかりしていた。

「すべて荷卸し終わりました」

ドライバーに向かって次郎が言った。

「ご苦労様、さあ物流センターに戻ろう」

ドライバーがやさしく言った。

次郎を乗せたトラックは守とカオリの前を通りすぎて行った。

守とカオリはただ呆然とトラックの後ろ姿を見送っていた。

店内には、次郎が置いていったシャンプーの箱を開け一生懸命それを陳列しているマドカがいた。

持ち続けた思い

次郎がガネーシャと会ってからもう二十年の月日が経っていた。
次郎は普通のサラリーマンになっていた。
何が普通かという、とにかく普通のサラリーマンというのがピッタリのサラリーマンであった。
。大学を卒業後、アルバイトをやっていた運送会社のお客さんであった今の会社に何のためらいもなく入社し、今にいたっていた。
学生時代から今も恋人はいない次郎であった。
次郎は人を好きになったことがなかった。
いいなと思うような女性もいなかった。
次郎の頭の中にあるのはいつも小学校二年の時のマドカ笑顔だけであった。
それは中学生、高校生、大学生になっても同じであった。
最近の次郎は二十八歳にもなって初恋の女の子をずっと思い続けている自分を少し変だと思い始めていた。
さて、深夜の幹線道路沿いのファミリーレストランで何か真剣に話し合いをしている三人組がいた。
あいかわらず飼育員の格好をしたガネーシャと二人の使い、金守と石屋カオリであった。
「そろそろ二人が会うときが来たようだ」
とガネーシャが言った。
「えっ、本当ですか？」
二人の使いが声をそろえて言った。
「これからが重要なのだ。お前はマドカさんの会社の社長になっていなさい」
と守に命令した。
「そしてお前はその会社のそばでスナックのママになって待機していなさい」
とカオリにも命令した。
「きっと近いうちに次郎君とマドカさんは会うことになる、そのときにそなえるのだ、頼んだぞ！」
ガネーシャは二人の使いに強い口調で言った。
「はい、ガネーシャ様！」
二人の使いは頭を下げながら言った。
ガネーシャは、その返事を聞いて満足して注文していたクリームソーダおいしそうに飲むのであった。
二人の使いは黙ってそんなガネーシャを見ていた。
ガネーシャの後ろのウィンドウ越しには深夜の幹線道路を行き交う車のハロゲンランプがまぶしく光っていた。

そして出会い

次郎は朝から忙しく働いていた。

彼の仕事はお客からの注文をまとめ工場に発注する仕事だった。

忙しそうに計算している次郎のそばで二人の先輩がスポーツ新聞を見ながら話していた。

一人の先輩が、

「何なに、青空動物園のゾウがまた長寿の新記録だってさ」

もう一人の先輩がその記事をのぞき込みながら

「人間だったら百歳は超えているようだぜ」

次郎は青空動物園のゾウのニュースにまったく気がつかないのであった。

そこへ次郎の部の部長があわてて入ってきて言った。

「困ったことになったぞ、丸金商事社長が納期遅れで怒っているそうじゃないか」

「あそこの新しい社長は相当おっかないらしいぞ」

と先輩の一人が言った。

「こうなったら全員で謝りに行きましょう」

もう一人の先輩が言った。

「そうだな、鈴木君、君も一緒に来たまえ」

忙しく仕事をしていた次郎は突然のことでよく状況が理解できなかった。

次の日、丸金商事の応接室で部長、先輩二人、次郎の四人が社長の面会のためソファーに座って待っていた。

そして運命の出会いがあっけなくおとずれた。

「お待たせいたしました社長がお待ちです。こちらへどうぞ」

と言いながらマドカが応接室に入ってきた。

次郎とマドカは同時に目を合わせおどろいた。

マドカはこの会社の社長秘書をしていたのであった。

その日の夜、石屋カオリのスナック「ガネーシャ」に、ついこの前から社長をやっている金守がみんなを引き連れて入ってきた。

「いやあ～、うちの宮島君とおたくの鈴木君が小学校の同級生だなんて奇遇だね、今日は私のおごりだ、じゃんじゃんやってくれたまえ」

次郎の会社の部長がもみ手をしながら

「ご馳走になります。でも、本当にこんなこともあるんですね」

と言った。

「ご機嫌ね、社長」

とカオリがそばに寄ってきた。

守とカオリは目を合わせてうなずいた。

次郎とマドカはみんなから離れた窓側の席に座っていた。

お互い話すこともなく黙っていた。

そこへ次郎の先輩二人がホステスを連れてやってきた。

「鈴木、お前のおかげで助かったよ」

もう一人の先輩が、

「それにしても二十年ぶりだなんて偶然にしてもすごいな」

と言った。

そばにいたホステスが、

「素敵ね、私もそんな劇的な出会いがしたいわ」

と言った。

「俺たちも今、劇的な出会いをしてるじゃないか、なんちゃって」

と先輩の一人ホステスに向かって言うと、もう一人の先輩とホステスが大声で笑った。

そして先輩二人とホステスは別のテーブルへ移っていった。

また、次郎とマドカは二人っきりになった。

お互い何を話しているのかわからなかった。

そこへバーテンが二つのカクテルを持ってやってきた。

「こちらはあちらのお客様からお二人に、再会のお祝いだそうです」

バーテンが指差す方向には、うしろ姿でカウンターに座っている飼育員姿のガネーシャがいた。

二人は立ち上がりうしろ姿の飼育員（ガネーシャ）に向かって会釈をした。

そして座りながら次郎が言った。

「びっくりしたよ」

「私もよ、次郎君、いえ、鈴木さん」

とマドカが言った。

「次郎でいいよ」

と次郎。

「次郎君、小学校の時、私が次郎君のこと好きだったのわかってた？」

とマドカが唐突に言った。

「えっ、クラスの人気者だったマドカさんがぼくのことなんて、、、」

驚いて次郎がこたえた。

「本当よ、私はこころのやさしい次郎君がずっと好きだったのよ」

「実はぼくもずっとマドカさんのことを思っていたんだ」

二人の使い守とカオリは次郎とマドカのまわりをゆっくりまわりながら目を合わせてうなずくばかりであった。

しばらく二人は黙っていた。

それは、自然な沈黙で二人にとってはここちよい空間であった。

しばらくしてマドカがバッグから何かを取り出しながら、

「そうそうこれ覚えてる？」

テーブルの上には例のリング（プルタブ）を置いた。

マドカはお守りのようにいつもリングをバッグに入れ持ち歩いていた。

次郎がおどろいたように思い出して、

「どうしてそれを？」

「次郎君が投げ捨てたのを拾ってずっと持ってたの」とそれを次郎に差し出した。

守とカオリはあわただしく二人のまわりをまわり始めた。

「次郎君に返すわ」

次郎はそれを受け取ってじっと見つめた。

「おかしいでしょ、私、ずっと信じていたの、最後の一つでしょ、これ」とマドカが恥ずかしそうに言った。

「思い出した！」

急に次郎は立ち上がって小さく叫んだ。

「どうしたの？」

マドカも立ち上がった。

「呪文だよ、呪文、この店の名前だ」

次郎リング（プルタブ）を指にはめ今度はマドカをじっと見つめた。

不思議なことに次郎の瞳の向こう側には、現在のマドカではなく、小学校二年生のマドカと自分、そしてあの青空動物園のゾウが映っていた。

そして次郎が何かをつぶやいた。

「・・・・・・・・。ガネーシャ！」

「何をお願いしたの？」

マドカが聞いた。

次郎は何か吹っ切れたように言った。

「マドカさんとこのままずっと一緒にいたいって！」

次郎はマドカの手を握った。

それはとても自然であった。

その横でガッツポーズをし、一瞬抱き合うが、あわてて離れる守とカオリがいた。

その一部始終を見ていたカウンターのガネーシャは微笑みながらゆっくりとウイスキーを飲み干した。

その後の次郎とマドカはどうなったかって？もちろん、ずっと一緒にいたいという次郎の願いは、、、。

その夜、強い偏西風に逆らいインドに向かって空を飛ぶ三つの影があった。

ガネーシャと二人の使い金守と石屋カオリであった。

「インドに帰るのも二十年ぶりだな」

のんきに喜ぶ守であった。

一方カオリはどうも次郎とマドカのあっけない出会いに不満のようだった。

「ガネーシャ様、たとえリングがなくても次郎君とマドカさんは出会ったのではありませんか？」
「そうかもしれん、でもお互いを思い続けるきっかけとしてリングが役立ったことは確かだよ」
「お前たちも長い間、ご苦労であった、さあ、インドでみんなが待っている急ごう」
ガネーシャがやさしく言った。

おわり